

# 市民力かわら版

第50号

平成27年12月1日  
編集/市民力かわら版編集委員会  
発行/矢板市秘書広報課  
電話: 0287-43-3764  
ファクス: 0287-43-2292  
Eメール:  
yaita@city.yaita.tochigi.jp

## 「市民力かわら版」第50号発刊にあたって

矢板市長 遠藤 忠

「市民力かわら版」が発刊され、すでに八年が経過した。そして今回、50号発刊という節目を迎えることができた。

市民記者が市民の視点を生かし、企画から取材・編集まで担って製作する隔月発行の広報紙である。

これまで地域の身近な話題や行事、日常生活に役立つ情報や地域のために地道な活動を続けている団体・個人などが紹介されてきた。

花火大会・あんどんまつり、冬の駅前を飾るイルミネーションなども紹介され、伝統行事が少ない矢板市の風物詩となりつつある。

特に印象に残っているのは、四年半前の東日本大震災直後の矢板市内の様子を伝えた記事である。

矢板市も震度五強の激震に見舞われ、建物の損壊や停電や断水などインフラに被害を被り、特に仮給水の完全復旧

には約五十日をも要した。

この時、これまで当たり前であったことが当たり前でなくなった日常生活を経験して、お互いが支え合い助け合い、自分たちのできることをするという当たり前の行為が「市民力」なのだということを教えてくれたような気がする。

「市民力」とは何なのか、その定義は難しいが、市民一人一人が、より良く生活していくために、その問題解決のために自らが取り組む気概、自分が住む地域は、自分たちのまちは、自分たちの力で何とかしなければという郷土愛・自治の心が市民力の根底にあることにも気付かせてくれた。時折、「矢板は何をやっても駄目だ」という嘆きの言葉を耳にする。

自分の住んでいるこのまちに誇りが持てなければ、矢板の将来はないのではないか。自分は矢板の住民であり、

矢板市民であるという意識がどれだけあるか、自分の住むまちにどれだけ愛着があるかが問われることになる。

このまちにどっぷりつかってしまおうと、いつの間にかその良さを見失い、周囲との比較ばかり気になって矢板は駄目だという嘆きの言葉だけになってしまおう。しかし、足元をよく見つめ直してみると、身近な日常生活の中に矢板の素晴らしさに気付くことが多々ある。

これからのまちづくりは、「無い物ねだりではなく、有る物探し」へとの方向転換が求められるのであろう。

このまちに生まれ、このまちで育ち、今このまちに生きている。市民それぞれがこのまちに夢を抱き、試練に立ち向かい、住んで本当に良かったと思えるまちにするのは、市民一人一人であり、行政には、その条件整備が問われる

ことになる。

「市民力かわら版」は、市内各地で活動するさまざまな人達やグループなどを取り上げ、そしてそれが、新たな「市民力」を生み出すきっかけづくりの役割を果たしている。

「市民力」という言葉を全国に先駆けて取り上げ、まちづくりのキーワードに据えてきた矢板市である。

地方創生元年と言われる今、この「市民力かわら版」が「市民力」とは何かということとを教えてくれている。



遠藤市長とかわら版編集委員会の皆さん